

ニルヴァーナ ni rvana



第2号 平成15年9月



コロニーで出会った少女達

本部：平田是賢（大円寺）
三重県桑名市入江町31 〒511-0086
電話：0594-23-1316

Fax：0594-22-9382

東京支部：

並里まさ子

群馬県吾妻郡草津町乙641-12 郵便377-1711

電話/Fax：0279-88-6692

e-mail：fukenc@dan.wind.ne.jp



男性ドミトリの
入り口



コロニーの自治会長と、TMRCのメンバーが
会談中。

ミャンマーのパゴー管区にあるハンセン病のコロニーを訪問しました。ここには今3020人が住んでいて、医師1名と数人の看護師さんが常駐しています。住人の多くは、ハンセン病の元患者さんとその家族です。この国には、もちろん隔離政策などありませんが、どこの国でもかつて患者さん達は互いに集まって住む傾向があり、自然にできたコロニーを、今は国が管理しています。少数ですが、新規の患者さんや再発した患者さんがいて、MDTの治療を受けています。

ドミトリと呼ばれる病棟のようなものがあり、ここには、身寄りのない障害者が、各人1つずつベッドを与えられて住んでいます。

この女性は妊娠中に発病し、家族から家を出されて困っていたところ、近所の人がこのコロニーに連れてきてくれたそうです。この元気な赤ちゃんは、コロニーで生まれました。こんな差別が今もあるとは驚きですが、社会のハンセン病観が変わるには、まだまだ時間がかかるのでしょうか。



投稿ご案内

ニルヴァーナ編集部は、皆様からのご意見を歓迎いたします。本誌に掲載し、さらに多くの方々に紹介して、意見交換の場としても活用させていただきます。

ミャンマーの衛生統計

平均寿命 : 59歳 (1996)
 先進工業国 : 77歳 (1996)
 5歳以下の死亡率
 ミャンマー : 150 / 1000出生 (1996)
 先進工業国 : 7 / 1000出生 (1996)
 日本 : 6 / 1000 (1993)

乳幼児の死亡率がとて
 も高いことが解ります。



村の人々
 外国人を見るのは、初めてだそうです。
 でもあなた方と同じような顔でしょ！

地域医療の最小単位はサブ地域保健所で、数千人の人口を抱えます。殆どの住民にとって、ここ以外での医療を受ける機会はありません。助産婦が1人、彼女の家族と共に常駐しています。他に保健要員が配置されている所もありますが、お産を含む全ての疾患と事故や怪我の手当て、予防注射などの健康管理も、彼女の仕事です。

ここはさらに、人口300 - 500人の村に分けられ、各村から1人ずつ、補助助産婦が選出されます。また10軒に1人ずつ無資格の保健要員がいて、協力しています。つまり末端の医療は、ヴォランティアの力で支えられていると言えるでしょう。



診療所に行く家族

連携団体(組織)の紹介

FIWC(フレンズ国際労働キャンプ・関東委員会)

委員長: 藤澤真人

神奈川県横浜市神奈川区西大町116-15

主として早稲田大学学生とOBよりなる

ボランティア組織 HP: <http://www.mognet.org/>

< 本誌の内容は、このホームページにてカラーでご覧になれます。 >

特定非営利活動法人: T・M良薬センター (TMRC)

理事長: 小野文班

事務所: 群馬県前橋市総社町総社1024 〒371-0852

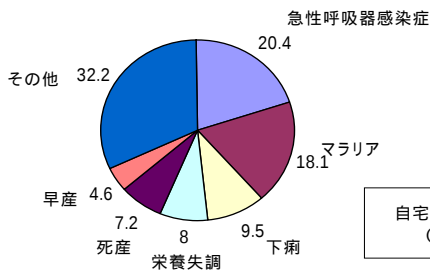
電話/Fax: 027-254-2325

主として群馬県の日蓮宗寺院団体が運営するNPO

栗生楽園・在園者の方々からの献金を基に発足しました。



風邪から肺炎を起こしたり、マラリアや下痢、栄養失調などで多くの子供が死亡します。



地域保健所 (RHC)

サブ地域保健よりも一段上の組織です。



ミャンマーの重大疾患上位15位

- | | |
|--------------|-------------|
| 1 マラリア | 9 人工妊娠中絶 |
| 2 結核 | 10 貧血 |
| 3 エイズ (AIDS) | 11 毒蛇咬傷 |
| 4 下痢・赤痢 | 12 眼疾患 |
| 5 蛋白欠乏症 | 13 肝炎 |
| 6 性病 | 14 新生児破傷 |
| 7 薬物乱用 | 15 麻疹 (はしか) |
| 8 ハンセン病 | |

ミャンマーの首都ヤンゴンには特別皮膚科クリニックがあり、ここでは主にハンセン病の治療をします。また化学療法でハンセン病は治っても、後遺症で手足などに感覚が無い (知覚麻痺) 人は、しばしば火傷や怪我をして受診します。ハンセン病の治療薬は無料ですが、傷の薬は買わなければなりません。一般に抗生物質は、現地の人達にとっては大変高価なものです。そこでTM良薬センター (TMRC) の皆さんから、このヤンゴン特別皮膚科クリニックに、1年分の抗生物質が贈与されました。これでたくさんの方が助かるはずで、今年8月下旬に、贈呈式が行われましたので、次回はこれについても報告します。

リンホウ村(中国広東省潮州市潮安県古巷鎮リンホウ村)

2003年3月SARS騒ぎが激しくなる少し前に、中国広東省のリンホウ村に入った中平 優氏からの報告です。

世界中が不況に泣く中、GNP急上昇で草木もなびく中国を訪れた。長距離バスの車窓から、バラック小屋が延々と続くその向こうに、近代的マンションが連なって見える。先発隊のフレンズ国際労働キャンプ(FIWC)のメンバー5人に迎えられて、中国ハンセン病療養所の中で最も貧困と言われている、広東省潮州市の「リンホウ医院」に到着した。

中国のハンセン病療養所は大小600 - 700箇所あると言われているが、ここはその中では最も小規模かも知れない。現地中国のラジオ放送にあったごとく、当地のハンセン病対策は、大巾に遅れていた。隔離は撤廃されていたが、トイレの無い暗い建物。入浴やシャワー浴もない、着たきりの粗末な衣類。卵や鶏肉などの蛋白源は、めったに食べられない。猫の額ほどの畑から採れる野菜は、大切なビタミン補給源である。月に1回、日本円で1,800円ほどのお金が支給される。この額が、各省、州によって異なることは後で知った。例えばクリスチャン関係では、3倍近い額が支給されている施設もあるという。

かつて入所者は300人いたが、今は高齢の13名が残っている。この中4人は歩行不能で、松葉杖歩行が1人、ほぼ全盲が1人、片目失明者が3人、手指・足趾の変形・欠落が10人といった具合である。ほとんどが知覚麻痺を持ち創傷のある人が7人で、その中早急に高度の医療が必要と考えられる人が1人いた。医薬品の投与にも問題が多く、何よりマンパワーの不足は深刻で、看護師は1人もいない。腐臭が漂う部屋で、汚れた布に被われた脚を開き、日本から持参した消毒液で傷の手当てを行った。



ハンセン病は治癒したが、後遺症、合併症に苦しみながら自分たちの行く末を憂う姿は、日本のハンセン病療養所と共通している。約1週間の滞在の中での大きな収穫は、現地師範学校の学生の中に、ボランティアグループが芽生えたことであった。彼らは自分たちの近くに、元ハンセン病患者が肩を寄せ合って生きている村があることを、知らなかった。



FIWCの吉田君と村の藤文さんが、一緒にお茶を飲んでいます。フーフー

若い彼らとの交流の席で、自分の目で確かめたリンホウ村の様子を語り、「どうすれば良いのか、また何ができるのか、一緒に考え、教えてください」と話すと、「これは私たちがやらねばならないことです。私たちはつい最近まで、ハンセン病と言う病気すら知らなかった。良いことをおっしゃっていただきありがとうございます。謝々シェシェ」と握手された。驚いたことに、翌日潮州TV局が、リンホウ医院を訪れた。TV局がリンホウを訪れたのは初めてだという。

潮州では健康保険制度のようなものは無く、前述の後遺症患者の治療費は、日本円にして約100万円程度必要とのこと。まず実現可能な話ではない。3月10日帰国の日、歩ける村人は全員「再見(サイチェン)、再見(サイチェン)」と涙を流して送ってくれた。彼らの姿と万年傷が、今も目に焼き付いている。 中平 優(看護師)



田代池に映る穂高連山

小松彦太郎氏作品(現職:国立療養所東京病院副園長)

草津の栗生楽園は、山々に囲まれた、風光明媚な温泉地です。ここに奉職する職員の多くは、写真の腕を磨きます。小松先生も、以前園長として2年間草津で過ごされました。



東南アジアに原産する

← イギリスの樹

この樹の実から抽出する大風子油は、化学療法の無い時代、ハンセン病の唯一の治療薬でした。今日本の療養所で生活する多くの人たちが、かつて大風子油の注射を受けました。

わずかに抗ハンセン病作用があったようですが、大部分の患者さんには、期待できるほどの効果は無かったと考えられます。

日本は主として、ビルマから輸入していたようです。



楽泉園の画家：もう60年以上、国立療養所栗生楽泉園に住んでいる鈴木さんは、日がな一日絵を描くことに没頭しています。日当たりのいい縁側に画材を並べて、衰えた視力をかばいながら、キャンバスに顔を近づけて、毎日描いています。鈴木さんは、心で絵を描きます。そして絵を描くことが生きる証、人間としての自分の証明だと言いきります。両手の指がほとんど無いので、手にビニール袋をかぶせ、ベルトをはめて絵筆を固定します。

鈴木さんが絵を描き始めたのは、戦後の混乱期に、あるニュース知ってからです。それは、ナチスの強制収容所に入れられていたユダヤ人の女性画家が、ガス室に送られる運命の子供たちに絵を描くことを教え、一時でも生きる喜びと希望を与えていたという記事でした。

この時鈴木さんは、過酷な運命を背負う自分の人生を、思わず慟哭にも似た愛を持って、この子供たちに投影させたのかも知れません。鈴木さんの画集には、「ひまわり」がたくさん出てきます。重そうな頭の出そうと、深い色が思考されていて、見る人をひきつけます。また明るい黄色を、思う存分光の中に遊ばせて、踊り出しそうな「ひまわり」もあります。四季折々の表情を見せる草津の山々、青い山、黄色い山、「空と山と川」を想う時、鈴木さんの心に深い安らぎがみなぎるようです。どのような状況にあっても、人は美しさや清らかさを求めるし、またそれに気付くことができるのだと、鈴木さんの孫に相当する年齢の私



人物紹介：寺田一郎氏 大正9年生 三重県名張市赤目町長坂795 赤目観光センター共同組合代表理事 医療法人寺田病院理事 その他役職多数

未だハンセン病に対する偏見の強かった昭和40年代から、国内の療養所に在園する方々との交流を、今日までずっと続けておられる方を紹介します。

寺田氏は、三重県名張市の出身です。ここにある一大観光地「赤目四十八滝」の生みの親でもあります。また近くに建つ寺田病院の理事として、地域医療にも貢献しておられます。防犯活動・公衆衛生事業その他多方面で活躍しておられますが、中でもハンセン病患者・元患者の方々との関係は、並々ならぬものがあります。たくさんの表彰を受けられ、ハンセン病についてだけでも4件ありますが、最も新しくは昨年秋に、勲六等・単光旭日章を受賞されました。

ハンセン病への貢献は、療養所で生活する三重県出身の元患者さん達の里帰り事業を、ボランティアで援助したことに始まります。まず宿泊施設の確保に奔走し、療養所の外へは殆ど出ることの無い人たちに、帰省の思い出を提供されました。また各地の療養所を慰問し、在園者と家族代わりの親交を深めてこられました。親族との交流を持たない方々にとって、寺田氏の訪問は、懐かしい伊勢の地への想いととも、どんなにか心温まる慰めとなったことでしょう。寺田氏はその手記に書いておられます。「・・・私の手をつかんで離さないほど喜んでくれた。会ってから帰るまでずっと泣き通しで、こちらも泣かされた。流した涙は、社会から理解されない悲しさ、言いようのない怒り・・・」

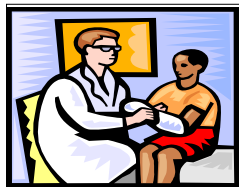


群馬県の栗生楽泉園へも、たびたび訪問しておられます。以前はたくさんおられた在園者も今では数人になりましたが、三重県人が集まると、いつも寺田さんの話題が出ます。

健康一口メモ <温湿布と冷湿布のどちらを貼る？>

温湿布は血管を刺激して血のめぐりをよくする作用があり、冷湿布は逆に患部を冷やして炎症をしずめる作用があります。冷湿布は痛みの起こった直後、炎症を抑えるために使います。普通の肩こりや五十肩の慢性期に必要なのは、血のめぐりをよくしてうっ血をとる温湿布の方が使われます。また、温湿布は入浴後に貼るほうが効果的で、入浴後は、毛穴が開いているので、薬が皮膚によく浸透します。ただし、汗をよく拭いてから貼りましょう。

松本栄美（栗生楽泉園 薬剤師）



次回はベトナム情報を掲載する予定です。

